

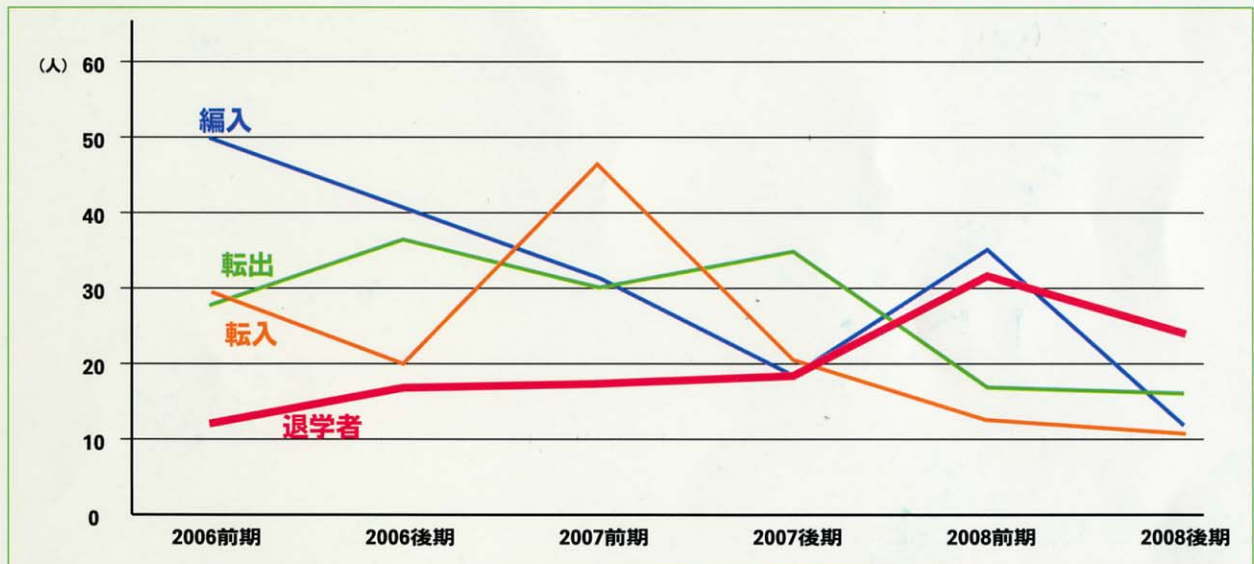
友だちが

学校をやめていく

— 増加する外国籍の子どもの退学 —

外国籍の子どもの動きのようす

県西部A市における公立小中学校の状況



(注)2009年3月分は未集計

- 転出・転入の子どもの数がここ数年で半減している。原因として、製造業の不振により、外国人労働者の動きが少なくなったことが考えられる。
- 2008年度に入って退学者が大幅に増えている。退学の理由は、保護者(外国人労働者)の解雇による帰国が多いと思われる。不況による雇用状況の悪化が子どもの生活に大きな影響を与えている。
- 編入の数が減少しているのは、景気の悪化に伴い外国の学校からの編入が減ったことが考えられる。また、内訳をみると国内にある外国人学校からの編入者の割合が高くなっている。

雇用が不安定な外国人労働者。そして、その子どもや学校の仲間、先生…。誰かがどうにかすれば簡単に解決できる問題ではないが…。何かできることはないか。どこから変えていけばいいのだろうか。このようなことが起きていることをどの程度知っているのだろうか。そして、どれだけの切実感をもって受けとめているのだろうか。

現状とその背景を知ることが、まず必要なことだと思う。

中学1年 男子



きのう、隣の中学校から転入生がやってきた。名前はA、ブラジル人だ。お父さんの仕事がなくなり、住んでいたところまでなくなったそうだ。親戚のBの家と一緒に住むという。Aは日本語が少しできるので話げできた。2日目の体育の時間で、Aはサッカーが上手だということがわかった。翌日、Aが転校する話を先生としていた。まだ、転校してきて3日目だよね。本当に驚いた。来週の金曜日には転校していくみたいだ。どうやら住むところが見つかって、浜松の方に引っ越すようだ。せっかくサッカーのチームに入ったのに。本当に転校するなら、お別れの色紙が何か作らなくっちゃ。みんなで一緒に撮った写真もない。先生に相談して、この前の合唱コンクールの時写した写真が体育大会の写真を使って作らないと。学級委員のNが先生のところに確かめに行ってくれた。やはりAの転校は本当だった。転校は金曜日ではなく、火曜日だという。本当に短い間だったな。体育と昼休みのサッカーのメンバーが減ってしまうよ。楽しかったのに。これで僕のクラスからの転校生は3人になっちゃった。

1年生担任

転入するAの家では給食費を払うことが難しい状態のようだ。父親が「大丈夫だ」と言ったが少し不安になった。次の日、父親が給食費を3ヶ月分払ってくれた。仕事がないということなのに大丈夫なのだろうか。

転入して2日目、急に転出する話を聞いたので、通訳の人から詳しい状況を聞いた。「親戚の家に間借りをしていたが、かなりシビアで『家賃を半分払え。食費を半分出せ』などと言われていたらしい。申し込んであった浜松市の住宅

に入れることになったので、できるだけ早く転校したい」ということ。学級の子もたちもAのことをいろいろ気遣っている。はっきりとしたことを伝えなくてはならないだろう。

週明け、Aが「明日が最後」と言ってきた。まだ前の学校から要録の写しも届いていないのに…。たった5日間の在籍。こんなに短い間の転出入は初めての経験だ。本人も短すぎて友だちや学校の思い出もないかもしれない。

新しい学校でも頑張してほしいと思う。

中学3年 女子

(ブラジル人の)Kが学校をやめると言っていた。お父さんが会社を解雇されたから。お母さんの仕事が見つかったのにどうしてだろう。本人はあまり気にしていないようだけど、どうして卒業まで学校に来ないんだろう？

今日は、Yが学校をやめてブラジルに帰国するという。割引チケットの有効期間内に帰国するらしい。両親はあとから帰国するっていうけど、一人でブラジルまで帰るのがなんて大丈夫なのかな。Jも両親と帰国すると話していた。まだ仕事のある兄さんだけ日本に残るらしい。

こんなに急に外国人の友だちがいなくなるなんてなかつたのに、不景気は深刻なのだろう。もうすぐ卒業なのに、Tも学校をやめると。「どうせ、あと少しだから、今やめても一緒だよ」と言っているけど、あと少しだからこそ、一緒に過ごしたい。

ブラジルに行ったら、もう会えないかもしれないのに…。どうして？



不景気は昔の世界大恐慌のレベルだと先生が言ってたけど、いまいち実感がなかつた。派遣村のニュースを見ても遠くのこととしが思っていなかつた。でも、こんなに急に外国籍の友だちがいなくなっちゃうなんて、きつとすごいことが起きているんだろう。

高校から入学書類を一式取り寄せて、中学校でポルトガル語に翻訳して高校に戻して、高校から当該の子ども家庭に配布してもらった。

保護者から中学校に、高校の入学金を分割にしてもらえないかという相談があった。さらに教科書や制服などにお金がかかるのに大丈夫だろうか。

「ブラジル人学校にいたけれど、仕事なくなりお金もないので公立校に通わせようかと悩んでいる。パスポートを担保にお金を貸してくれないか。」という声を聞いた。

「日本人より一生懸命働いて、休まず不用品も出さなかったのに、外国人から解雇された。日本にきて10年も働いているのに、法的にも政治的にも何も保護されない。」父親の言葉を聞き、本当につらかった。

最近、職員室で話題になったこと

正月明けに転校する子どもが一気に増えた。仕事を解雇され、アパートから追い出されるということが、うちの学校の子どもの上にも起きている。



外国籍の子どもたちの状況を知って…

最近のニュースは不況を伝えるものが多く、「派遣切り」という言葉がいつの間にか聞き慣れた言葉になってしまっている。短い期間に学校を変わることになったり、親しくなった友だちと別れなければならなくなったり、以前では考えられなかったことが頻繁に学校現場で起こり、子どもたちに深刻な影響を及ぼしていることが分かった。

外国籍の子どもたちにとって、学校に慣れ、頼ることができる友達をつくるゆとりがなければ、学ぶ喜びを感じる学校生活をおくることはできないのではないだろうか。また、去っていく子どもたちだけでなく、短い間であっても、ともに過ごした学級の子どものうちや地域の子どものうちも「せっかく友達になれたのに」「どうして？」と寂しさや悲しさを感じるのではないだろうか。

現在、私が勤務する学校にも外国籍の子どもたちが在籍しているが、子どもたちはどうかして意思の疎通を図り、仲間になろうとしている。そうした時間は、子どもたちにとって何物にも代え難い経験となっている。子どもたちが笑顔を絶やさず生き生きと生活できる環境づくりについて、考えていく必要を感じている。(所員)

「100年に1度の世界的な不景気…」毎日のように派遣切りや製造・販売業の縮小などの記事を新聞で見る。契約社員や外国人労働者が真っ先に解雇の対象になっている。しかし、こうした人たちと関わる機会が少ないせいもあり、あまり切実感をもてなかった。

外国籍の子どもの様子を知り、景気の悪化が様々な影響を子どもたちに与えていることを実感した。影響を受ける最後のところに「子ども」がいる。日本にきて、文化に慣れ、言葉に慣れ、友だちもできた「外国籍の子ども」。外国の友だちを受け入れ、ともに頑張ろうとする共生の心が芽生えた「日本の子ども」。そして、子どもに寄り添いながら子どもたちの交流を育てようとしている現場の教員。このような交流やかかわりはすべて、「不景気」という社会の影響を受けて崩れ去ってしまう。

転入・編入してくる子どもの学校への適応、校納金などの問題、転出・退学していく子どもたちの未来を心配しなければいけない現状がある。このようなことが、日常的に自分の同じ立場の人間の周りで起きていることを考えると…。(所員)

2008年度「国際連帯と平和研究委員会」

所員

内田 勝之(東豆) 村田 智(三島) 芦澤 純(駿東) 吉川 宏(静岡) 久保田 勇司(清庵)
片山 示(志太) 鈴木 崇浩(磐周) 島津 和徳(浜松) 土屋 吉平(浜名)

共同研究者

栗岡 幹英(奈良女子大) 伊藤 恭彦(静岡大)